

稲・大豆作情報 (NO. 7)

1. 水稻作況情報田の生育概況 (8月14日現在)

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 c m	茎 数 本/m ²	主稈 出葉数	葉色 SPAD	
夢しずく 佐賀市 本庄町	6/17 17.7株/m ² (平年6/16,18.1)	本 年	94.0	404	13.4止葉	34.7	8月2半旬は、高温(+1.2℃)、 寡照(68%)、多雨(168%)。 ◇平年と比べ、 草丈：「夢しずく」は平年並み、 「さがびより」は低く、「ヒヨクモチ」 はやや低い。 茎数：「夢しずく」は多く、「さ がびより」は少なく、「ヒヨクモチ」 は平年並。 主稈出葉数：すべての品種で平年 並 葉色：すべての品種で淡い。 ★「夢しずく」8/17出穂予想、 「さがびより」は幼穂5~7mm、 「ヒヨクモチ」は幼穂1mm未滿。
		平 年	94.7	354	13.2止葉	36.8	
		平年比	(99)	(114)	(0.2)	(-2.1)	
さがびより 小城市 芦刈町	6/20 18.6株/m ² (平年6/19,17.2)	本 年	73.4	417	13.9	33.8	
		平 年	82.9	453	13.7	35.4	
		平年比	(89)	(92)	(0.2)	(-1.6)	
ヒヨクモチ 小城市 牛津町	6/28 19.6株/m ² (平年6/27,18.8)	本 年	64.2	673	13.5	38.2	
		平 年	68.4	649	13.5	40.5	
		平年比	(94)	(104)	(0.0)	(-2.3)	

注1) 各品種 前作：麦 注2) 施肥及び病害虫防除は地区基準に準ずる

注2) 平年値は、過去10年間(H25~R4)の平均値(さがびよりについては、R1年を除くH24年~R4年の平均値)

◆農業試験研究センター米づくり情報 第7号 8月14日(抜粋)

移植日	項目 品種	年 次	草 丈 cm	茎 数 本/m ²	葉 齢 L	葉色 SPAD	概 況 (平年と比較して)
平 年	94.2	392	13.3	36.6			
平年比(差)	96	106	+0.5	+2.3			
6月20日	ヒノ ヒカリ	本 年	80.8	516	13.4	40.5	
		平 年	83.7	476	13.5	36.2	
		平年比(差)	97	109	-0.1	+4.3	
6月20日	さが びより	本 年	78.9	466	13.7	36.6	
		平 年	79.3	476	13.7	35.7	
		平年比(差)	99	98	±0	+0.9	
6月20日	ヒヨク モチ	本 年	74.5	762	14.5	37.2	
		平 年	71.9	607	13.9	35.7	
		平年比(差)	104	126	+0.6	+1.5	

注1) 耕起概要等は前号参照。

2. 水稲管理

中干し後の湛水と高温で、下葉枯れや葉先の黄化で、全体的に葉色が淡く見える圃場が多い。これから穂肥を施用する圃場では施用量を増やしすぎないように注意する。

また、すべての品種で、幼穂形成期～穂孕み期～出穂期に達しており、水分ストレスを与えないよう間断灌水を励行し、湿潤状態を保つようにする。

○穂肥

さがびより

・穂肥の施用時期は、幼穂長5～10mmが基準。

穂肥診断で、穂肥の施用が可能だった圃場は、施用時期となっているので、早急に施用する。

*診断基準は、前号参照

ヒヨクモチ

・穂肥は下記の診断結果を基に施用する。

・穂肥施用時は湛水し、その後の間断灌水では、地固めと根に空気を送るため落水期間を確実にとる。地が緩い場合は、落水期間をやや長めにとる。

ヒヨクモチの穂肥施肥基準(分施タイプ)

	穂肥Ⅰ(kg/10a)	穂肥Ⅱ(kg/10a)	実肥(kg/10a)
施用時期の目安	8月15～17日頃 (幼穂形成始期 幼穂長1ミリ頃)	8月25～27日 (穂肥Ⅰの10日後)	穂揃期 (9月8日～10日頃)
LPBB804	40	—	—
BB602	25	10	10

※「全量元肥施用田(一発くん)」において、穂肥Ⅰ～Ⅱの時期にSPADで40を切る場合には、窒素成分で2kg/10a程度(BB602 10～20kg/10a)施用する。

○病害虫情報(発生および防除)

・「病害虫発生予察情報予報第4号(7/27発表)」で、8月は以下の予報が出ているため、今後も発生状況に留意し、適切な管理を行う。

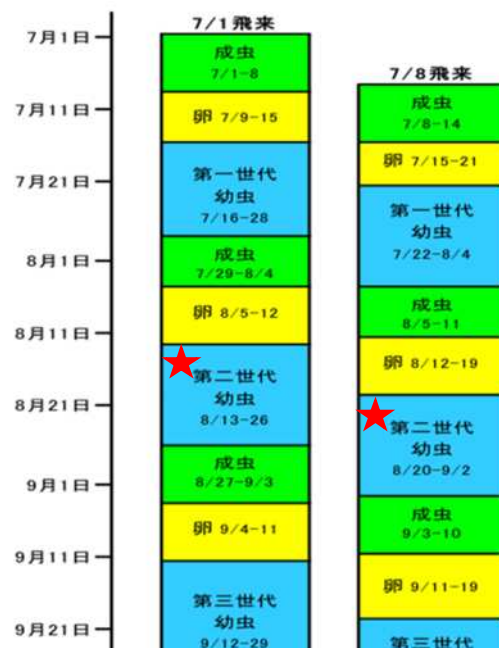
【トビイロウンカ】・・・やや多

・8/14調査した圃場では、トビイロウンカは確認していないが、その他ウンカ類の幼虫を少ないが確認している。発生状況を注視し、適期適正防除に努める。

・防除効果が高い時期は、幼虫ふ化揃い期(各幼虫期の前半(図中★))である。

【有効薬剤:オーケストラ・エクシード・エミリア など】

・防除する場合は、湛水するとともに薬剤が株元まで十分にかかるように丁寧に散布する。



トビイロウンカ各世代の発生予測
(第2版、2023年7月25日作成)

【コブノメイガ】・・・やや多

- ・8/14 調査で、食害跡と幼虫を確認している（特に「ヒヨクモチ」で多い傾向）。
- ・止葉を含む上位3葉に被害が発生すると減収につながるため、幼虫ふ化揃い期（発蛾最盛期の7日後）に防除を実施する。

【斑点米カメムシ】・・・やや多

- ・耕種的な防除として、畦畔除草を出穂10日前までに行う。
- 出穂後の除草は、水田内に斑点米カメムシ類を誘い込んで被害を助長するため、時期を逸した場合には収穫前まで除草しない。
- ・山麓部や河川敷付近など、例年発生が多い圃場では田廻りを励行し、防除を徹底する。
- ・防除はカメムシが穂に上ってくる夕方に行うと効果が高い。

草刈りの時期(目安)	斑点米カメムシ類の防除時期
さがびより 8/20頃まで	◎多発生:「穂揃い期」及び「乳熟期」の2回防除
ヒヨクモチ 8/28頃まで	◎少発生:「乳熟期(出穂の約15日後)」1回防除

【紋枯病】・・・やや多

- ・8/14の調査後、更なる進展は確認していない。今後も気温が高いと予想されており、多発の気象条件となっている。今後、発生が急増する恐れがあるため、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展する時期（液剤、粉剤の場合は出穂20～10日前を目安とする）に防除を徹底する。

3. 大豆管理 ～ 生育に応じた適正管理を ～

7月中下旬播種の圃場では、培土を実施している圃場が多く見受けられるが、一部、大豆の株元まで土寄せが出来ていない圃場もある。

今年は、播種時期の遅延や乾燥で、大豆の生育が小さいため、培土による生育量増大の効果を発揮させるため、しっかりと株元まで土を寄せるよう留意する。

○生育状況

- 7月15日播種 本葉7～8葉目
- 7月20日播種 本葉5～6葉目
- 7月下旬以降 本葉3～5葉目

※同じ播種時期でも、土壌水分の有無や降雨の有無で生育は異なる。

○中耕・培土

培土後は、土寄せした部分から不定根が発生し、根量が増加することで、根粒菌の活動も活発になり、大豆の生育も旺盛になる。今後、培土を実施する圃場では以下を参考に培土を実施する。

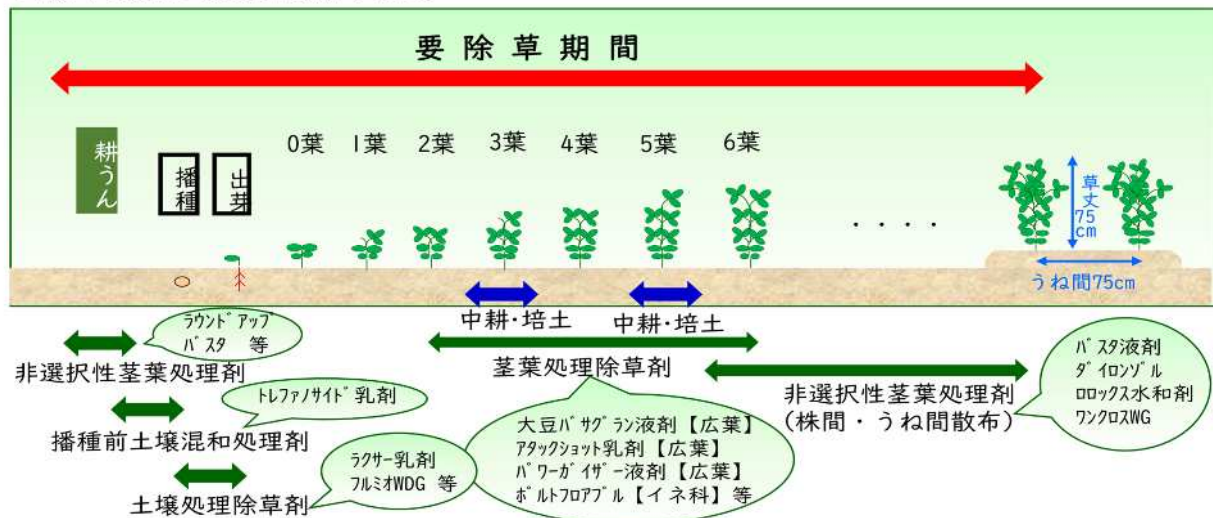
〈実施時期の目安〉

- 1回目:本葉2～3枚の頃、子葉が隠れる程度におこなう。
- 2回目:本葉4～5枚時に、初生葉(子葉の上の葉)まで隠れるようにおこなう。

※培土は、大豆栽培で重要な作業の一つであるが、気温が高い日中の作業は、土壌水分の蒸散を助長するため、作業は夕方以降が望ましい。

○雑草対策・・・除草剤と中耕培土などの耕種的防除の組み合わせが重要

■除草技術と実施時期の目安



○水分ストレス対策（干ばつ対策&スムーズな排水対策）

大豆は、水分ストレスに弱い作物であるため、圃場の過乾燥対策として暗渠排水の閉栓を行うとともに、大雨時のスムーズな排水対策として明渠やうね間、排水溝をつないでおくなど対策を講じておく。

○病虫害対策（発生及び防除）

「病虫害発生予察情報予報第5号（8/9発表：大豆 8月下旬）」で、8月下旬は以下の予報が出ているため、今後も発生状況に留意し、適切な管理を行う。

【ハスモンヨトウ】・・・やや多い

- ・8/14の管内調査圃場では、目立った発生は見られなかったが、県内他地区で寄生が確認されている。
- ・一カ月予報では、「気温は高く、降水量はやや多い」とされており、多発生の条件となっている。
- ・白変葉（若齢幼虫の集団による被害）の増加し始めが防除適期のため、圃場をよく観察し適期防除を実施する。



【他のチョウ目：オオタバコガ・ウワバ類など】

- ・8/2～4の防除センターの調査で、寄生が確認されている地区がある。
- ・ハスモンヨトウと同様に、気象予報では多発生の条件となっている。
- ・葉に大きな穴が開いた株が目立ち周辺に青虫がいる場合は、オオタバコガによる食害の可能性が高く、稀にミツモンキンウワバやシロイチモジヨトウが含まれる場合もある。
- ・防除薬剤は、オオタバコガが主流であればプレバソンやペガサス、シロイチモジヨトウの場合はプレオが効果的。
ミツモンキンウワバは、ハスモンヨトウと同時防除可能である。
- ・オオタバコガやシロイチモジヨトウには、ノーモルト、トレボンは感受性が低下しているため、使用を避ける。
また、防除にあたっては周辺作物へのドリフトに注意し実施する。



令和5年産水稻生育期間気象グラフ（アメダス：佐賀）

佐城農業振興センター

